產地化取組事例



J A 三重南紀 甘夏部会

【内容】

- 1. 取組品目
- 2. 地域の概況
- 3. 取組のきっかけおよび近年の生産状況
- 4. 現況および課題と対応
- 5. 今後の展望(まとめ)

1. 取組品目

・枳実とは? 【第17改訂 日本薬局方:キジツ】

本品はダイダイCitrus aurantium Linné var. daidai Makino, Citrus aurantium Linné又はナツミカンCitrus natsudaidai Hayata (Rutaceae)の未熟果実をそのまま又は それを半分に横切したものである.

・生産工程



①専用園地



②収穫径の指標



③収穫(7月)



4洗浄&径での選別



5径での選別詳細



6半割



7乾燥



⑧乾燥完了

2. 地域の現況

	歴史	
江戸時代	1600年代、農家の軒先に小みかんや八代みかんが植えられていた程度。	
明治後半 ~大正初期	北勢・中勢・南地域に温州みかんが移植された。 東紀州地域では温州みかんとともに夏みかんが移植された。 第2次世界大戦までの栽培面積は約1,350haまで増大した。	
戦前~戦中	戦争によって多くが廃園にまで追い込まれた。	
戦後	復興ブームで面積が拡大し始める。	
昭和30年代 後半	選択的拡大施策により、県営や団体営農地開発事業での開畑が進められ、急激 に面積が増加した。	
昭和47年頃	一次は3,000haまで増加したが、昭和47年の大暴落を境に、昭和50年以降生 産調整策が実施された。	
平成9年	面積が1,720haまで減少。	
	栽培面積は徐々に減少しているが、地域毎に特徴のある産地形成が進む。 ・中北勢地域 青島温州等高糖系の貯蔵出荷 ・南勢町では早生、中生温州の年内完熟出荷 ・東紀州地域では極早生温州の早期出荷と優良中晩柑の完熟出荷	

東紀州地域の概要

- ・カンキツ産地 海岸線に位置する5市町村で、県内の栽培面積は県内の約65%を占める。
- ・カンキツ品種 品種は温州みかんが全体の7割(内、極早生温州が約4割、早生温州が約6割) 中晩柑の品種は甘夏、伊予柑、セミノール、不知火、カラ、サマーフレッシュ。 ハウスみかんからサマーフレッシュまで年中みかんが採れる地域。
- ・特徴 温暖な気候と年間 2,800ミリの多雨条件を生かした温州みかんの早期出荷、 越年品種の栽培が可能なことによる周年供給体制。
- ・園地 軽労化をねらいとした国営開畑団地(御浜地区)を中心に栽培されている。 県営圃場整備事業による金山パイロットも有り。 スピードスプレヤーや施肥機等の導入も進んでいる。
- ・ J A 三重南紀 平成 9 年の農協広域合併に伴い 4 市町村が一つの産地となった。 栽培面積は県下最大の規模を誇っている。

3. 取組のきつかけ および近年の生産状況

当時のJA三重南紀の状況・・・

	プラス要因	マイナス要因
内部環境	+ 大規模な甘夏栽培 (出荷量:生2,000~3,000 t) + 国営パロット事業で整備した園地有 (約330ha⇒温州77ha、甘夏63ha) + 過去、生薬問屋への生産実績有	▲生産者の高齢化
外部環境	+ 三重大学、三重県のサポート有 + 実需者側の既存取引先が周囲に有	▲甘夏市場単価が下落傾向 ▲現状、生薬問屋との取引は無 ▲農薬の使用前日数

取組当初の状況

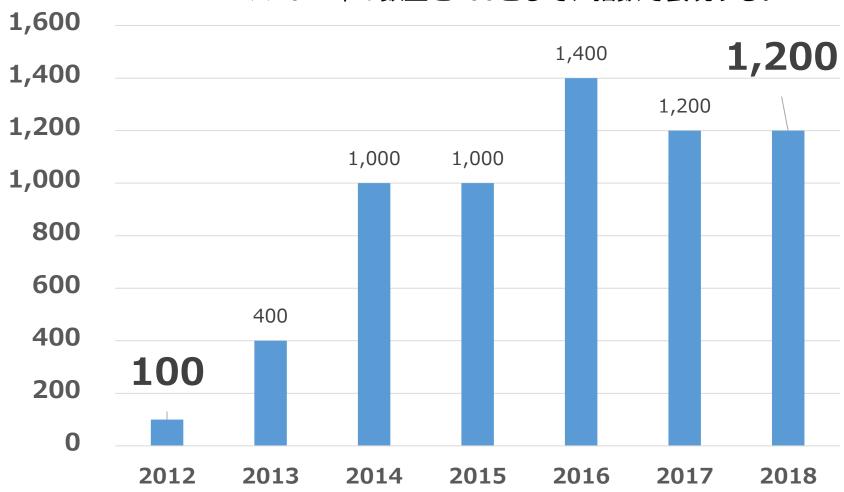
2011 年度	・三重大学主導で 「実需者と生産団体、行政」 の面談を実施。 ・窓口業務や、使用農薬についての課題解決方法を模索。	
2012 年度	・実需者が生産団体の現地視察を実施。 ・基原植物の適合を確認。 ・使用農薬は最小限のものとし、枳実専用園地で生産することで合意。 ・ コスト試算を実施 ⇒コスト高の予測もあったが長期的に両者で協議することとした。 ・ 役割分担 として、初年度は収穫作業などに専念することとし、加工調製は実需者の既存生産団体で実施する。 ・初年度生産 ・三重県の 補助事業 (1百万円)と自己資金により、乾燥機と選果機、昇降機、洗浄機を導入。スライサーは実需者からの提供。 ・乾燥場所にはJAが過去に使用していたライスセンターを活用する	
2013 年度	 ・正式契約の締結 ・JAと県とで、枳実専用の剪定方法を見出し、栽培の最適化を図る。 ・生産団体で初の加工調製実施。 乾燥や選別の程度など、実需者や既存生産団体と協力して作業にあたる。 ・2年目生産量 初年度から4倍の拡大 ・県主導で経営指標を作成し、実需者側と取引条件を交渉。 	

⇒産官学の協力体制

生産量推移

枳実製品数量

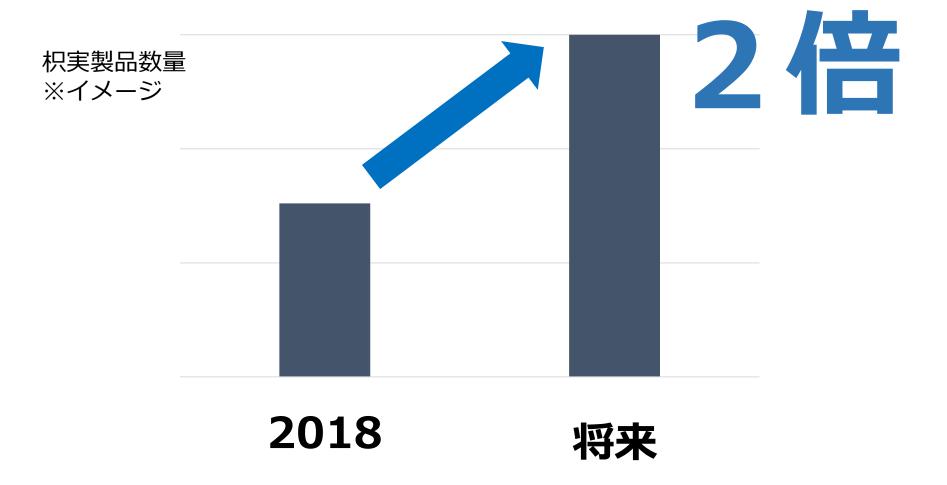
※2012年の数量を100として、指数で表現する。



4. 現況および課題と対応

分類	課題	対応
栽培技術	最適樹形への剪定	甘夏生食用よりも低い樹形とすることで、収穫の作業性を改善 剪定については、JAと県が主導となって推進。
	使用農薬	メーカー使用許可農薬の範囲で、防除価とコストを踏まえて J A と県が最適な防除暦を作成し、推進。
経営指標	作業時間、資材情報 単価設定	県が主導となり、枳実専用栽培の経営指標を作成。 メーカーは、経営指標や生産者との意見交換により単価を設定。
加工調製 技術	径のコントロール	日局で生薬の径の上限が設定されており、それを満たすように注意喚 起と指導を行った。選果機を用いて、機械的な選別も並行した。
	品質基準の相互確認	切断面の様子や、乾燥仕上げ程度など、メーカーと JA・県で共に目合わせを行った。
加工調製設備	建屋	JAの既存設備を利用
	冷蔵庫	JAの既存設備を利用
	乾燥機	取組開始2か年は近隣のメーカー既存取引先で加工。 同時に加工技術ノウハウを集積しつつ、3か年目からは現地で加工。

5. 今後の展望(まとめ)



「生産者のため」を第一に、 今後とも枳実生産に取り組んでいきます。